

南北朝内乱と出雲国

2021年11月28日(日)

島根県立古代出雲歴史博物館

伊藤 大貴

はじめに～14世紀の南北朝内乱とは～

- ・南北朝時代のイメージ
後醍醐天皇・足利尊氏・新田義貞・名和長年・塩冶高貞など
戦乱を描いた物語『太平記』→戦後の吉川英治の小説、NHK大河ドラマ(1991年)
- ・南北朝時代とは
2つの朝廷(北朝と南朝)が分立する状態が続いた時代→足利義満の統一事業
厳密に言えば、1336～1392年まで60年近くを指すが、今回は直前の鎌倉幕府滅亡から取り上げる
- ・内乱の時代
鎌倉幕府の滅亡、建武政権の樹立と崩壊、朝廷の分裂、室町幕府の成立と内紛など
新たな体制が出来上がっていく激動の時代、全国規模の激しい戦乱と複雑な対立関係
- ・山陰地方との関係
実は発端の地だが、錯綜する対立関係と戦乱の数々→全ての説明は困難、視点を絞る
①対象地域・出雲国、②守護の立場から見た内乱史、③戦乱による地域社会への影響

1. 南北朝内乱とその時代

(1) 鎌倉幕府の滅亡

- ・鎌倉時代末期：貨幣経済の進展、御家人の窮乏、北条氏の専横、悪党の活動、社会不安
 - ・天皇家：大覚寺統と持明院統の2系統に分立、幕府の仲介により交代で皇位継承
 - ・後醍醐天皇：「中継ぎ」の天皇として即位するも現状に不満、幕府を倒す意思を固める
 - ・元弘元年(1331)に挙兵するも失敗
 - ・翌年3月に隠岐へ流されるが、脱出
 - ・元弘3年(1333)：後醍醐天皇は伯耆国船上山に立てこもる→各地の勢力結集・蜂起
 - ・山陰の諸勢力も多く結集、後醍醐天皇は杵築大社の神威に期待を寄せる
- 足利尊氏は京都、新田義貞は鎌倉を攻撃



1331～1333年の後醍醐天皇の動き

◎後醍醐天皇の執念、各地で渦巻く不満が絡み合うことで鎌倉幕府は一気に滅亡へ

(2) 建武政権の成立と崩壊

- ・鎌倉幕府滅亡後、後醍醐天皇は山陰地方の軍勢などを率いて京都に帰還
- ・天皇中心の政務体制を開始(建武政権の成立)→論功行賞人事により伯耆の名和長年、出雲の塩冶高貞といった山陰地方の領主たちは建武政権下で要職に登用

- ・その一方で中央に持ち込まれる案件の増大、命令の矛盾、社会の混乱→政権の動揺
- ◎意欲的な政治体制も混乱、政権を支えた有力者・足利尊氏の離反を招いて早々に崩壊

(3) 南北朝の分裂と室町幕府の樹立

- ・足利尊氏は建武政権に不満を持つ各地の武士を結集、一時敗走するも再び京都奪回
- ・建武3年(1336)：尊氏は光明天皇を擁立(北朝)、京都で室町幕府を樹立
- ・対する後醍醐天皇は大和国吉野に逃れて抵抗継続(南朝)
- 各地の諸勢力が中央政権の分裂、戦乱の影響を受けながらさらに抗争が広がっていく
- ◎新たな政権の誕生+朝廷が南朝・北朝に分裂して争い合う時代の始まり

(4) 観応の擾乱と全国争乱

- ・貞和5年(1349)～室町幕府までも内紛を引き起こす(観応の擾乱)→これを機に南朝方も攻勢を仕掛けて様々な勢力が入り乱れて対立、全国に波及して泥沼化
- ・室町幕府も土台から動揺する中、尊氏の跡を継いだ2代将軍・足利義詮は敵対勢力を受け入れる融和方針に転換→徐々に幕府へ復帰する者が増えて平和実現、戦乱沈静化
- ・南朝や反幕府勢力も弱体化に向かう→のち3代将軍足利義満の下で南北朝合体が実現
- ◎ようやく14世紀の終わりになってから幕府は安定期へ入る=内乱の時代の終わり

2. 南北朝期出雲国をめぐる山名・佐々木両氏の争い

(1) 塩冶高貞の登場と死

- ・鎌倉幕府：諸国に守護・地頭を設置して全国統治→鎌倉時代末期～塩冶氏が出雲守護
- ・室町幕府でも全国支配の担い手として守護が活躍、戦乱の過程で強大化、地域権力化
- ・塩冶氏：源氏一門の佐々木一族出身、出雲国塩冶郷(現・出雲市上塩冶町一帯)を拠点
- ・塩冶高貞：建武政権期には出雲守護→のち足利尊氏の下へ
- ・建武政権・室町幕府にとって地元出身の塩冶高貞は出雲支配を担う重要人物
- ・ところが暦応4年(1341)に高貞は突然失脚→京都から出雲へ逃れるも死亡
- ◎今まで要となってきた塩冶高貞の死は出雲国支配の転換を示すことに

(2) 佐々木道誉と山名時氏—南北朝の両雄と出雲国—

- ・山名時氏の登場：隣国の伯耆守護として塩冶高貞の追討を担当、出雲で活動の形跡
- ・康永2年(1343)：佐々木(京極)道誉が出雲守護就任
- ・道誉：派手好みの婆娑羅大名として有名、尊氏の下で活躍、のち「武家権勢導誉法師」
- ・塩冶高貞の死後：出雲守護の地位は山名氏と佐々木氏の間で行ったり来たり

【出雲守護の移り変わり】

～1341年：塩冶氏→(山名氏)→1343年：佐々木氏→1351年：山名氏→1352年：佐々木氏→1379年：山名氏→1391年：佐々木氏(※正式な任命は1395年)

- ・その後、観応の擾乱^{かんのう じょうらん}をはじめとした全国規模の争乱が勃発→山名・佐々木両氏は互いに敵対する陣営に分かれて争い合う構図が長年続く＝事実上のライバル的な存在

◎南北朝時代の出雲国：主に山名・佐々木両氏の間で揺れ動く地域

(3) 山名・佐々木両氏の出雲国支配

- ・室町幕府が任命した正規の出雲守護の地位にあった期間が長いのは佐々木氏だが、長い戦乱の間、出雲国内には様々な勢力が入り乱れる状況
- ・その中で勢力を伸ばしたのは山名氏、戦乱に乗じて出雲で佐々木氏を圧倒
- ・貞治2年(1363)：長年反抗していた山名氏が幕府復帰、戦乱中に築き上げた勢力の保持をおおむね認められるが、出雲守護の地位は引き続き佐々木氏へ(再出発)
- ・宇賀氏の土地没収(闕所^{けっしょ})処分をめぐって佐々木氏が山名氏に気を遣う様子

【史料】佐々木高秀書状(島根県立古代出雲歴史博物館蔵)

宇賀左衛門三郎本領事、為闕所被入使者譴責之由承候、^①彼仁者山名殿被官人之間、御口入候、闕所有無事、就注進自是も彼方へ可尋申候、是へ更不承候、^②楚忽沙汰不可然候、可被閣候、猶々彼所事、委細注進候て、於地下違乱者可被止候也、恐々謹言、

八月十一日 高秀(花押)

隠岐彦次郎殿

【傍線部分の意訳】

- ①(出雲の武士である)宇賀左衛門三郎が代々領有している土地を没収処分にするのを聞きました。
- ②彼は山名殿の家臣のため、(山名側から処分について)口添えがありました。
- ③軽率な措置はよくありません。(処分はまず)止めなさい。

【補足】

- ・差出人：(佐々木)高秀＝道誉の息子で後継者。当時出雲守護。
- ・宛先人：出雲で現地支配を担った守護代隠岐氏の一族か。

◎平穏な時期に入っても守護佐々木氏だけでなく山名氏も出雲の諸勢力に影響を及ぼす

(4) 「室町時代」のはじまり－明德の乱－

- ・応安4年(1371)に時氏(69歳)、応安6年(1373)に道誉(78歳)と相次いで死去
- ・康暦元年(1379)の政変：出雲守護は佐々木氏から山名氏へ交代
- ・守護に戻った山名氏は守護代に塩冶氏を任命して国内統治(山名－塩冶の支配体制)
- ・ところが山名氏は当時の將軍足利義満と関係悪化、のちに反乱を引き起こして京都に攻め込むも敗北・勢力後退(明德の乱)
- ・乱後の明德3年(1392)、出雲国は京極高詮^{たかのり}に付与(正規な守護任命は応永2年⁽¹³⁹⁵⁾)
- ・その後は山名残党の蜂起を鎮圧しながら京極氏による出雲支配が定着していく

◎山名・佐々木(京極)の二大勢力の間で揺れ動く時代から京極氏の時代へ＝室町時代

3. 南北朝の戦乱と出雲の地域社会

(1) 軍忠状から読む出雲の武士の「大移動」

- ・足利尊氏の事例：建武2年（1335）2月～同3年（1336）6月の間、京都→鎌倉→京都→九州北部→京都と遠征を繰り返す
- ・軍忠状ぐんちゆうじょう：戦功を書き上げて軍事指揮者に上申した文書（後日の論功行賞などの証拠）
→合戦の様子が細かく記されており、当時の戦乱を具体的に知ることができる素材
- ・出雲国人こくじんの一例：諏訪部氏すわべ（三刀屋氏みつや、現・雲南市三刀屋町を拠点とした一族）



①観応元年（1350）7～8月の軍事行動

②建武4～5年（1337～8）の軍事行動

◎地元で戦うだけではなく、大移動・遠征の連続 ※日本列島規模の戦乱＝南北朝内乱

(2) 戦乱と地域社会

- ・軍勢の移動→交通路の確保が重要に

南北朝期の軍事行動：港や宿駅といった交通の要衝で警備・合戦する事例が散見

(例1) 伯耆の敵を防ぐ

「安来津」(現・安来市)

= 中海に面した港

(例2) 石見の敵を攻撃

「院原宿」(現・川本町)

= 江の川と山間部の陸路沿い

(例3) 交通路上で合戦

「白潟橋」(現・松江市)

= 大橋川に架かる橋 (水陸の要衝)



- ・城をめぐる戦い：本格的な城郭戦が始まる時代

(例) 観応元年（1350）の石見国人・佐波氏攻め（『太平記』巻28「三角入道謀反事」）

江の川に面した佐波氏の居城（現・美郷町）を攻撃

守る側：厳しい地形（山・川）・逆茂木さかもぎ（バリエード）・搔盾かいだて（盾を並べて防御）

- 攻める側：渡河戦（敵は城へ逃げる）→様子見→^{やいくさ}矢軍（弓矢戦）→夜討ち
- ・ 社会の分裂、戦乱への対応：^{ふろうざんがくえんじ}浮浪山鰐淵寺（現・出雲市）
南朝方と北朝方に寺院内が分裂→貞和3年（1347）、危機感を抱いた僧たちは融和・
合同の方針へ転換
- ◎鎌倉から室町へ社会が移行していく時期の大規模戦乱→地域社会を巻き込みながら展開

《まとめ》

- ・ 南北朝内乱：元をたどれば山陰地方が発端の地、鎌倉から室町への「過渡期」
- ・ 山名氏と佐々木（京極）氏の間で揺れ動く時代を「南北朝時代」と位置付けると、山名氏が排除された14世紀の終わりが一つの転換点
- ・ 京極氏の時代＝出雲の「室町時代」のはじまり

【主な参考文献】

- ・ 市沢哲編『太平記を読む』（吉川弘文館、2008年）
- ・ 『出雲国浮浪山鰐淵寺』（浮浪山鰐淵寺、1997年）
- ・ 兵藤裕己校注『太平記』（岩波書店、2016年）
- ・ 松江市史編集委員会編『松江市史 通史編2 中世』（松江市、2016年）
- ・ 森茂暁『佐々木道誉』（吉川弘文館、1994年）
- ・ 森茂暁『戦争の日本史8 南北朝の動乱』（吉川弘文館、2007年）
- ・ 山田徹『京都の中世史4 南北朝内乱と京都』（吉川弘文館、2021年）